

龍谷顕真会会報

— も く じ —

山本隆俊代表世話人挨拶.....	2
龍谷顕真会 2016 (平成 28) 年度活動報告・役員名簿	3
龍谷顕真会 2016 (平成 28) 年度『総会』開催報告	4～6
龍谷顕真会 2016 (平成 28) 年度『公開講演会』要旨	7～18
龍谷顕真会『第 10 回国内研修』開催報告	19～28
会員名簿・会員活動報告.....	29～30
龍谷顕真会総会について・公開講演会のお知らせ.....	30～31
事務局より.....	32



『第 10 回国内研修会 < 東京教区 >』 (於国会議事堂前)

ごあいさつ



代表世話人

山本 隆俊

平成二十八年度第四十二回龍谷顕真会総会において、代表世話人の重責を引き続きお受けさせて頂き、この一年間総会で決定された活動計画に則り、本会の運営を進めてまいりました。

もとより浅学非才の私を世話人・会員の皆様、事務局の皆さんの献身的なお支えを頂き、本会の活動を進めることができましたことに厚く御礼を申し上げます。

宗門は、新しい時代の第一歩を踏み出し、昨年十月から第二十五代専如ご門主様の「伝灯奉告法要」がご修行され、国内外各地から多くの

方々が参拝されておられます。

私たち龍谷顕真会も新しい時代に即応した活動を展開するため、昨年の総会で、会則の整理や時代を見据えた活動方針が議論されました。「人口減少・少子高齢化時代」「情報のグローバル化」における「地域社会と僧侶のありかた」など今日的な課題についても、議論を進めていきたいと考えております。

特に、本会の現職議員が減少する中、本会にて度々議論される「僧侶議員・議員経験者が地域社会と如何に向き合うのか」「現代社会における寺院の社会的役割」などのテーマについては、継続的に議論を重ねていきたいと考えております。

また、国内外の研修会等の機会に関係団体や門信徒の地方議員との交流の場を設けたり、龍谷大学政策学部との連携協力を深め、地域社会における僧侶議員の意義を話し合う場を設けていきたいと考えております。今まさに僧侶議員が宗教者として

「いのち」や「本当の豊かさ」について政治と向き合うことが重要であると考えています。

私たち龍谷顕真会は、地方自治体の首長・議員及びその経験者により構成された本願寺派僧侶による組織であり、その活動は浄土真宗のみ教えに基づき、聞法と組織的な社会的実践活動に寄与することを目的とし、自他ともに心豊かに生きる社会の実現であり、行政との関わりを持つ者として、広く宗門や社会に提言・発信、行動を行うことが使命であると考えております。

宗門では、宗門総合振興計画の種々の事項が推進されている中、私たち龍谷顕真会も宗門や社会に対して、これまで以上に貢献してまいりたいと思います。

会員各位におかれましては何卒ご協力をよろしくお願いいたします。

合掌

2016 (平成28)年度

龍谷顕真会活動報告

一. 世話人会の開催

第一回 二〇一六(平成二十八)年四月五日(火)

午後一時三十分～午後三時三十分

第二回 二〇一六(平成二十八)年五月二十一日(土)

午後一時～午後一時四十分

第三回 二〇一六(平成二十八)年五月二十一日(土)

※総会開催中、代表世話人互選のため開催

第四回 二〇一七(平成二十九)年二月十三日(月)

午後一時三十分～午後三時三十分

二. 総会の開催

日 時: 二〇一六(平成二十八)年五月二十一日(土)

午後二時三十分～午後三時三十分

会場: 開法会館三階研修室①

出席者: 十三名

三. 講演会の開催

日 時: 二〇一六(平成二十八)年五月二十一日(土)

午後四時～午後五時二十分

二〇一六(平成二十八)年度総会に引き続き開催

会場: 開法会館三階研修室①

講師: 末原 達郎教授

(龍谷大学農学部長)

講 題: 『人間にとって農業とは何か』

出席者: 四十一名

(会員十二名、同伴者、龍谷大学関係者、一般参加者等)

四. 第十回国内研修会の開催

目的: 会員相互の親睦と教養の向上を目的とする

期 日: 二〇一六(平成二十八)年

七月二十八日(木)～三十日(土) 二泊三日

視察先: 東京教区

参加者: 十七名

(会員八名、同伴者五名、事務局四名)

五. 宗祖降誕会・千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要・伝灯奉告法要・御正忌報恩講参拝

六. ホームページの内容更新

〔ホームページアドレス〕

<http://r-kenshin.hongwanji.or.jp/>

七. 新規会員の入会奨励

役員名簿

(平成二十八年五月改選)

代表世話人

山本 隆俊 (元茨木市議)

世話人

谷口 隆徳 (土別市議)

竺川 紹隆 (元金城町議)

大前 寛乗 (坂出市議)

藤谷 光信 (元山口県議)

島田 教明 (山口県議)

松月 よし子 (糸島市議)

会計監査員

大塚 泰雄 (元高島市議)

荒木 行也 (元みやま市議)

2016
(平成28)年 度

龍谷眞会総会

一、日 時／二〇一六（平成二十八）年

五月二十二日（土）午後二時三十分～午後三時三十分

二、会 場／聞法会館三階 研修室①

三、出席者

代表世話人 山本隆俊

世話人 谷口隆徳 大塚泰雄

竺川紹隆 大前寛乗

荒木行也

会 員 柴田薫心 松山教宗

窪田享信 藤谷光信

秋里勝道 高原隆則

唯有幸明 〈教区順〉

事務局 東森尚人（事務局長）

佐藤浩紹 田坂優子

池田唯信 小原一静

◎開会式

（一）開式の辞

（二）勤行『讃仏偈』（調声…大塚泰雄 世話人）

（三）代表世話人挨拶（山本隆俊 代表世話人）

（四）総長挨拶（石上智康 総長）

◎永年勤続表彰式

勤続十年表彰

唯有幸明（大分県国東市議会議員・

勤続十年表彰 ※欠席のため報告
大分教区国東中組妙光寺住職）

岩本誠生（高知県長岡郡本山町議会議員・

四州教区高知北組西光寺住職）

◎総会

（一）事務局長挨拶

（二）議長選出

大前寛乗 世話人を議長として選出

（三）議長挨拶

（四）配布資料の確認

（五）出欠報告

（会員三十一名中出席者…会員十三名・

委任状十四名）

◎議案審議内容

報告事項

①会員の動静について

協議事項

①二〇一五（平成二十七）年度活動報告

②二〇一五（平成二十七）年度歳計決算

③二〇一六（平成二十八）年度活動計画

④二〇一六（平成二十八）年度歳計予算

⑤役員改選について

⑥その他

◎公開講演会（午後四時～午後五時二十分）

講師／末原達郎 教授

（龍谷大学農学部長）

講 題／『人間にとって農業とは何か』

※七頁から公開講演会内容を記載

出席者／四十一名

丸田教雄 副総務

龍谷眞会関係者（会員十二名、

会員同伴者、事務局長、事務局四名）

龍谷大学関係者（赤松徹眞学長、石田徹

政策学部長、津秋博之農学部教務課課長）

一般参加者ほか

◎交流会（十八時～十九時三十分）

会 場／京都東急ホテル

（京都市下京区堀川通五条下ル）

出席者／二〇名

中戸康雄 総務、丸田教雄 副総務

龍谷眞会関係者（会員九名、事務局長、

事務局四名）

龍谷大学関係者（赤松徹眞学長、石田徹

政策学部長、末原達郎 農学部長、津秋博

之農学部教務課課長）

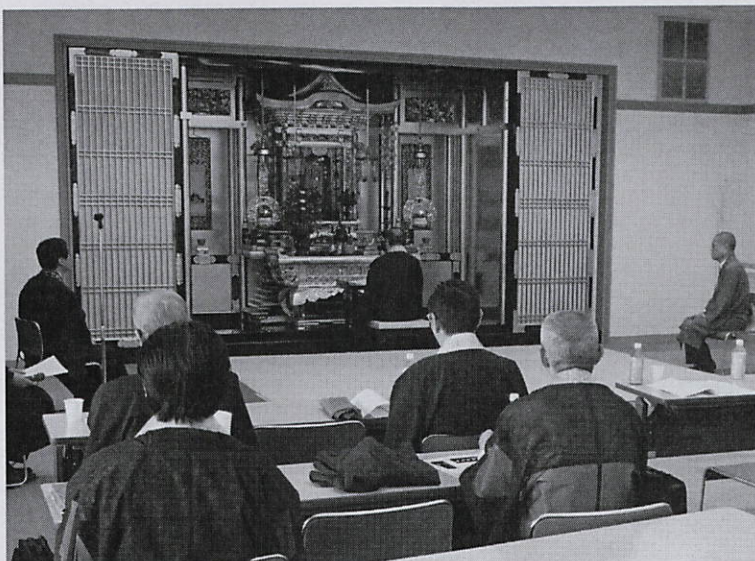
以上

龍谷顕真会平成二十八年 度

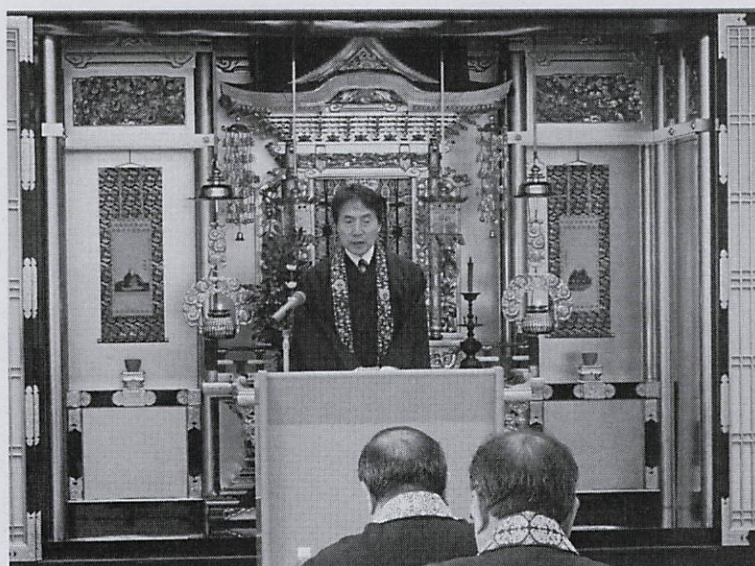
総会グラフ

開催日／二〇一六（平成二十八）年五月二十一日（土）
会場／聞法会館三階 研修室①（総会・公開講演会）
京都東急ホテル（懇親会）

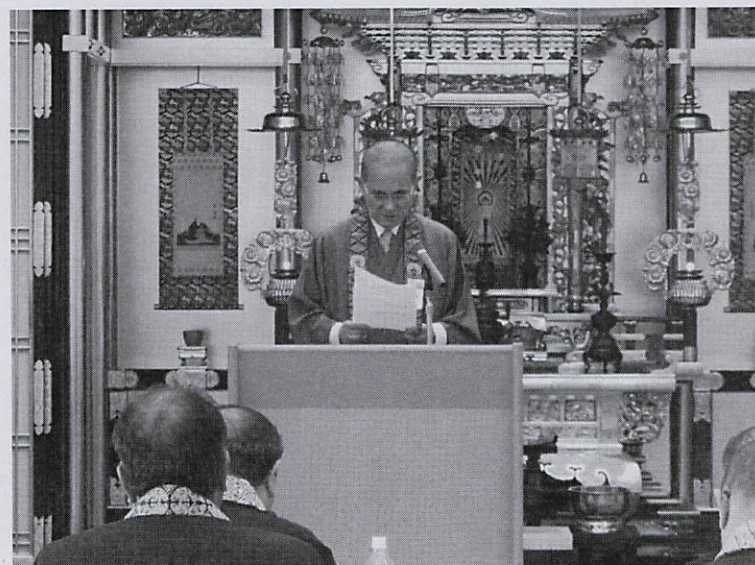
勤行



山本隆俊 代表世話人 挨拶



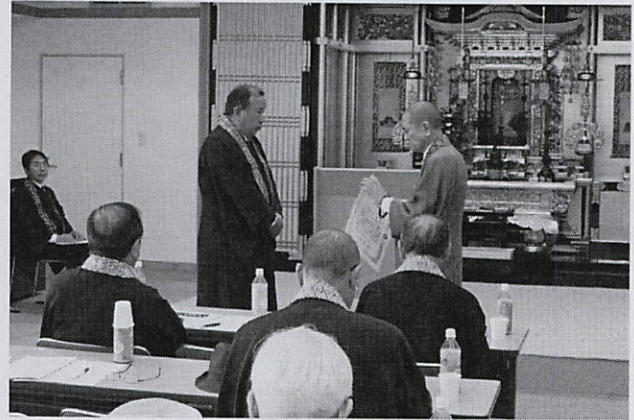
石上智康 総長 挨拶



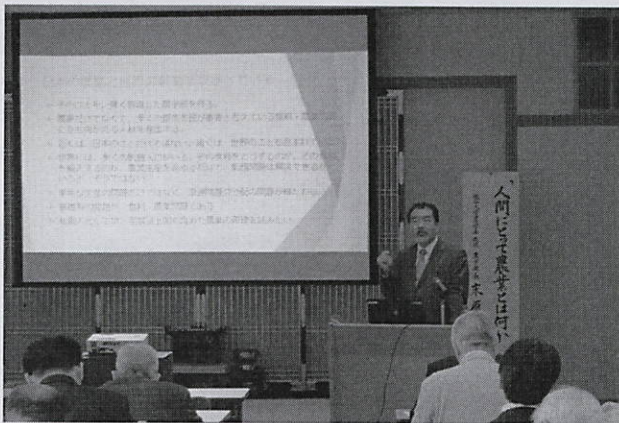
総 会



永年勤続表彰式



講演会

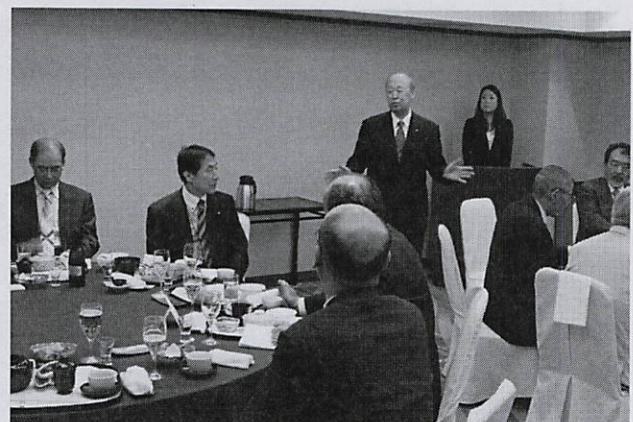


末原達郎 教授



赤松徹眞 龍谷大学学長 挨拶

交流会



人間にとって農業とは何か

開催日：2016(平成28)年5月21日

場 所：本願寺聞法会館

龍谷大学農学部長

末 原 達 郎 教授

二〇一六年五月二十一日、龍谷顕真会公開講演会が開催されました。

「龍谷顕真会」は、浄土真宗本願寺派の僧侶で、公職選挙法に基づき公選された地方公共団体の議会議員および長並びにその経歴者によって構成されています。昭和四十九年に結成以来、僧侶として聞法につとめ、会員相互の連絡提携を密にし、宗門の組織的な社会的実践活動に寄与することを目的として活動し、一昨年には結成四十周年を迎えております。

市町村合併や社会環境の変化により、最大七十六名であった会員も現在三十一名に減少しておりますが、独自の活動とともに、国会議員の門徒などで構成される「築地聞真会」との懇談や、鹿児島別院や鹿児島教区内寺院の門徒で、鹿児島県選出国會議員及び県議会・市議会議員などで構成される「本願寺鹿児島別院顕真会」、また、東京都議会議員で構成され昨年結成された「築地敬親都会」との交流も始めたところです。併せて、国内外の研修会や公開講座、意見交換や情報共有につとめております。

さらに、昨年から、二〇一一年に設置された龍谷大学政策学部とも地域公共人材の育

成や政策立案を学び、連携協力を深めております。そのような中、昨年は、富野暉一郎氏(龍谷大学名誉教授・元逗子市長)より講演いただきました。

今年度は公開講演会とし、末原達郎氏(龍谷大学農学部教授・農学部長)に講演いただきました。冒頭では、赤松徹真氏(龍谷大学学長)及び石田徹氏(龍谷大学政策学部長)より挨拶をいただき、引き続き、約六十分のご講演をいただきました。講演内容は、日本農業や食の現状、仏教と農業に共通する考え方、龍谷大学農学部をめざすものなど、農業を中心として日本社会の現状と課題に関わる内容でありましたので、広く学びを深める意味からその内容を掲載いたします。

また、宗門では、宗門総合振興計画の『基本方針Ⅱ宗門の基盤づくり』の中で、「持続可能な寺院のあり方を検討、運用」すること掲げています。その事業の一つとして、「都市と農村の接点づくり」「人の交流」などから「寺院・地域活性化」への派生効果に向けた龍谷大学農学部のインターンシップ受け入れを寺院で行う連携を進めております。その内容については、本号28頁をご参照ください。

講師紹介

末原 達郎氏

(すえはら たつろう)

龍谷大学農学部教授・農学部長



■プロフィール

1951年、京都市生まれ。

京都大学農学部卒業。

京都大学大学院農学研究科博士後期課程満期退学。

京都大学農学博士。

富山大学助教授、京都大学大学院農学研究科教授（食料環境経済学科長、生物資源経済学専攻長）を経て、2014年4月より龍谷大学経済学部教授・農学部設置委員会委員長。

2015年4月より龍谷大学農学部教授・農学部長。

■専門

農学原論、比較農業論、食料人類学、アフリカ研究。

■著書

- ・『人間にとって農業とは何か』（世界思想社）
- ・『文化としての農業・文明としての食料』（人文書館）
- ・『赤道アフリカの食糧生産』（同朋舎出版）

■編著

- ・『アフリカ経済』（世界思想社）

■共著

- ・『農業問題の基層とは何か——いのちと文化としての農業——』（ミネルヴァ書房、2015）
- ・『食と農の教室① 知っておきたい食・農・環境 はじめの一步』（昭和堂、2016）

日本農業は危機に直面している

龍谷大学農学部長をしております末原達郎です。「人間にとって農業とは何か」を講題に掲げました。現在、日本農業は危機に直面しています。特にTPP（環太平洋戦略的経済連携協定）の問題ですが、それだけに留まらず、日本の社会は大きな問題を抱え、基盤的な構造が大き

く揺らいでいます。

日本の文明社会の基盤をつくってきたもの、それは食と農でした。この基盤である食と農が、現在根本から変化もしくは崩壊しようとしております。今後どう対応していくかをよく考える必要があります。

しかし、危機は、チャンスでもあります。日本社会の中で問題を解決していく努力が必要です、社会システム自体を

より持続的で、回復力のあるものにする必要があります。可能性はあります。何をなすべきかを今、考え始めるべきだと思います。

まずは、われわれの社会の基盤を支えるものとして、農業を見ていく必要があります。TPPをはじめとする仕組みは、すべてを市場やマーケットに委ね、海外から輸入すればすむという議論があります。しかし、日本では食料を生産し供給しています。日本は都市型の社会ではありませんが、都市国家ではないのです。日本には、1億を超える人口と国土という領域があり、市場システムだけでは、すべてを解決できないというのが、TPPが抱える問題点の一つです。より大きな視点で、今後どうやって新しい社会をつくっていくのか、子どもたちの世代、さらには孫の世代の社会をどうつくっていくか、食料を考え、農業をどのようにすべきか考える必要があります。

食料と農業を一体の問題として捉える

龍谷大学で農学部を開設して特に感じたことは、これまでは食料政策や農業政策は、農村の問題として捉えられてきたが、今は都市に住む人も、食料政策が重要だと考え始めているということだ。都市に住んでいる人が自分の食料をどうするのか、自分の家族の食料をどう支え、どう保ち、それを50年後、100年後に続けていくにはどうすれば良いのかを考えるようになっていきます。

したがって現代では、都市や農村という枠組みをこえ、一体となって農業問題を考える必要があります。農村だけが農業問題を考えてはいけけない、むしろ農業問題は国民の政策であり、市民的な政策でもあるのです。

逆に、食料が滞^{とどま}るか否かは、基本的人権の問題です。農業問題としてだけでなく、食料と農業、一体の問題として捉

えるべきです。農村や農家にとって、都市の住民を味方にできるチャンスでもあります。都市の住民が、農村の人たちと問題を共有して、解決の方向に進むべきです。

そこで、私たちは食料と農業を分断するのではなく、結び付けて考えることを強く意識した農学部をつくろうと考えました。しかも日本の農業は世界の農業とつながっています。食料問題、農業問題は国内に限定する時代ではなく、輸入や輸出を通して、世界規模の問題となっています。それを認識し実感として捉えられる人が必要です。

食料が足りなくなれば外国から輸入すればいいだけではすみません。輸出する相手側の国の生活もやはり考えなければいけません。世界には多くの飢餓^{きが}人口があります。その食料もどうするのか、世界全体としての動きを考えなければいけません。

日本の農村社会のしくみ―「講」と「結」

私の研究は農学で、特に農業経済学で卒業論文を書き、ゼミは、農学原論という分野でした。農学原論は、英語でいうと Philosophy of Agricultural Science になります。「農学という科学の哲学」です。つまり、どうやって農学というものを進めていくのか、これからどこへ進んでいけばいいかを考えるのです。非常に哲学的で、思惟的な世界ですが、私はその研究をフィールドワークに基づいて進め、日本の農村を研究対象としました。岐阜県にある小さな村に出かけ、水田稲作以前から続く焼畑^{やきはた}という畑作の村の研究をしたのです。

その時、初めて報恩講^{ほうおんこう}に参拝しました。もともと都市にあるお寺の報恩講に祖母が参っていました。農村のお寺の報恩講は初めてでした。岐阜県郡上郡の村の報恩講で、お勤めの後、お斎^{とぎ}を参拝者と一緒にいただきました。おかずは



贅沢なものではなく、大根の炊いたものや、お漬物などで質素でしたが、ご飯が山盛りで大変驚きました。おそらく、昔から報恩講の機会にご飯が食べられることを、とても重視していたのだと思います。

なぜ報恩講に参拝したかという、講の研究をしたかったからです。講は、農村社会の中で、最も中心的な社会組織をつくっていました。家と家をつなぐ血縁

としての一族の関係とは別に、横につながる関係です。報恩講を中心として、この村の伝統的な社会組織の研究を卒業論文にしました。

さらにもう一つ、「結」というものがありました。現在、日本の村ではあまり残っていないと思いますが、労働力を助け合う、共同して助け合っていくという相互扶助の組織です。

田植も、「結」でないと動かない側面があり、一家の労働力だけでなく周りの人たちの手を借り、助け合いながら回していくのが「結」です。非常に長期的な力で、相互扶助の仕組みになっていました。

結局卒業論文は、「伝統的村落組織の変容とその現代的意味」としました。具体的には結と講の研究ですが、家を中心にしたネットワークが、どうやって横につながるのか、そして、地域社会を形成しているかという研究です。その一部は、NHK出版から『環境と文化』として出版しました。

沖縄の互助組織ユイマールの研究

その後、大学院に行き、沖縄の多良間島をフィールドに、家と家との結び付きに関する調査をしました。ここにも共同して助け合う組織である結、ユイマールがありました。しかし、そこに市場経済が入ってきて、市場経済化されていきました。社会全体が市場経済化の中で変容していくプロセスを研究し、市場経済と社会との関係を調査する結果となりました。今、TPPの問題で、安いサトウキビの輸入が問題となっていますが、この時は現代の農業問題につながるとは想像もしていませんでした。

アフリカ農民の研究を通して

次に大学院の博士課程に入って、熱帯雨林の国コンゴで、アフリカの農業と食料の研究をしました。

アフリカの農業の研究をすると、農業

以外のことをしている人たちとの関係が見えてきます。狩猟採集する人たち、牧畜をする人たち、そして都市に住んでいる人たちなどと農業をしている人たちの関係、それらを学びながらフィールドワークをしていました。

アフリカの内陸部にあるコンゴは、当時、ザイール民主共和国といいました。アフリカは、70年代は飢餓の大陸といわれ、餓死者^ががたくさん出ているということとを問題として、研究を進めました。が、実際は必ずしもすべてが飢餓ではなく、都市には食料があり、農村もわれわれが考えているような状態ではなかったのです。

農村における食料はイモ類を中心に成りたっていました。基本的な食料は、自分たちでつくり、自分たちで食べるという生産消費型の仕組みができ上がっており、むしろ飢餓は少ないのが実情でした。

この時、さまざまな農業を見ましたが、中でも女性の共同労働のような組織

があり、日本の田植えの「結」と同じような形でした。つまり、小規模な仕組みの中で農業を回そうとすると、家と家との結び付き、女性と女性の結び付きが必要でした。ただし、日本とアフリカの「結」の決定的な違いは、家を単位としているか、個人を単位としているかでした。アフリカでは個人を単位としています。日本は、家を単位として、労働力をやりとりしています。

現金が必要なのは週1回開かれる定期市の時だけでした。市場以外の日は、自分でつくったものを自分で食べるのです。こういう社会は、飢餓や飢饉^{ききん}のときに耐える力があります。もし、すべて商品作物、例えばコーヒーばかりを植えている国でしたら、そうはいきません。一度現金に換えてから食料を手に入れる国では、飢餓や飢饉がよくあります。

また、農民だけでなく狩猟採集民の研究もしました。農民と違い狩猟採集民は、ものを持ちません。蓄積という概念がなく、ストックしないのです。その人

たちがやがて農業を開始すると、土地を利用することになり、農業と狩猟採集とは違う社会の見方ができます。

狩猟社会は、ものをすべて共通に分ける非常に平等な社会です。ところが、農民になると、土地を持ちます。土地を持つと、ストック（蓄積）があり、どうしても格差が生じます。理念的には平等社会であっても、現実には格差が生じてくる。特に土地を持っている人と、土地を持っていない人との差が出てきます。

しかもアフリカの農民は、しばしば飢饉に襲われるため、平等化への動きがあり、常に格差を是正するような仕組みをつくり出しています。例えば労働力を集めるにも、ある人が特定の労働力を集めるのではなく、お互いに順繰りに回していくような、日本の「結」と同じような仕組みです。Ikilimba（リキリンバ）という現地語にあたります。単身の女性が労働力を獲得しようとするとき、自分たちの力だけでできないときに労働力を提供する、贈与するという仕組みもまた

同じように、リキリンバ（結）という言葉で呼ばれていることがわかりました。

このように、狩猟採集民と比較しながら農民や農業を考えていくと、一方では格差が広がる可能性があり、一方では社会を平準化、平等化するような仕組みと、両方がありました。

さらに、狩猟採集民から農民に変わると、食料は安定するので非常に単調な生活になります。今でも農業をしている人たちは、ごく少数の種類の食物に依存して生活を始めなければなりません。人間の持っている食物に対する多様性を受け入れ、その中でも効率のいい農産物に依存して生きていくことになることが、アフリカでの研究を通してよくわかりました。

つくり手が見えない——食料と農業の分断

農業や食料の重要性に気付いたのは日本に帰ってからです。特に日本の社会では食料と農業が分断されていることに驚

かされました。

例えば、昔、京都の街中でも、上賀茂^{かみかも}の農家の方々が農作物を荷台に積んで売りに来ていました。「振り売り」といい、常に食料と農業との結びつきを意識させられ、この季節に何を食べるかということとを意識しながら暮らしていました。時代を経ると、八百屋さんやスーパーの売り場で、少ない情報で判断するしかありません。これは、不可視化をする仕組みで、現場で取れた農作物が自分たちの口に入ってくる実感が持てず、つくり手と食べ手の間を寸断する形になります。流通や卸^{おろ}しの力が増し、論理としての市場経済化が進展していました。

都市の住民から見れば、農業というのは、はるか向こうにあり、見えないものになりました。人間にとって、食料はとても大事でこだわりますが、食べ物をつくっている現場が全く見えなくなりました。市場経済化の進展が、農産物を見えなくしていく仕組みになったと思います。

食と農を再び結びつける農学をめざして

このような問題を解決するには、見えるようにする、「見える化」が必要です。自分の身体をつくっている食事と、農産物を産み出す農業とを結び付けて考えることができる仕組みです。

農業の分野で昨今、川上と川下を結び付けるとよく表現されますが、もう少し深く人間の身体をつくっているもの、食べ物がどうかたちで、どこでつくられて、どのように育ち、自分の食物となっているかを、はっきりと見える形で捉える必要があるでしょう。

最近フードシステムとも言われていますが、もう少し人間の根源的な姿から考えると、フードチェーンになります。英語では food chain といい、食物連鎖^{しょくもつれんさ}のことです。フードチェーンの両端には食べ手と作り手があり、その社会を形成するのが、市場的メカニズムです。

食と農を結び付け、一体化して捉える 農学

- ▶ 見える化をしよう。食と農を結び付けよう。
- ▶ われわれの身体と、食事と、農産物と、それを生み出す農業とを結び付けよう。
- ▶ 流通で考えれば、川上と川下を結びつけること。フードシステムという。
- ▶ しかし、それでは、人間の本性が隠れてしまう。
- ▶ あえて、フード・チェーン（食物連鎖）として、とらえ、表現する。
- ▶ フード・チェーンの一方に、食べ手があり、一方に作り手がある。
- ▶ それらが一体として、食料・農業問題に挑む。
- ▶ 市場経済化による分断に対する再構築。食料危機の現代だからこそ、可能になる。
- ▶ 農学部を、新たに開設する意味にもなる。

そこで、市場化による分断をもう一度再合成して、目に見える、自分の身体としての実感と農業とをつなげる仕組みとする、農学部^{ひそ}の開設が重要でした。

農学部^{ひそ}の開設には、さまざまな議論があり、最終的には大学執行部が決定しました。日本の大学の農学部は、密かに拡

大していましたが、「農学」を名乗らなかった。資源生物科学部や、バイオテクノロジー学部など、農という問題に触れずに、技術だけで行動したところがあります。しかし、技術だけで何が解決できるのかという基本的な問題がありました。

農学と仏教に共通する食の考え方

食べ物に対する基本的な関心は、私は、農学と仏教では共通していると思います。人間の身体は、光合成ができません。つまり、太陽の光を浴びて、自立的に生きていくことができない存在です。

自立的に生きられないので、光合成ができる植物か、植物を食べた草食動物をいただくしかない。そうして、われわれの身体はできているのです。光合成のできないわれわれは、生きていくためにどうしても必要なエネルギーを獲得するため、動物もしくは植物の命の、いずれかをいただくことには、生きていくこ

とができません。それによってようやく自分の命をつなぐことができる存在です。この事実から目をそらすことはできません。

生命を考え、食を考える以上、さらに踏み込んで農業のことを考えざるをえません。このことを基本に考えて、大学執行部は、農学という名前を前面に出して、こうと考えたのだと思います。決して、多くの大学にあるバイオテクノロジー学部でもなく、資源生物科学部でもなく、農学部として、理念をもって立ち上げようとされました。私立大学では35年ぶりの農学部の開設でした。

一方で、「農学部」ではたして学生が集まるかというリスクもあり、不安でした。しかし、実際には、募集の結果、非常に反応が良かった。多くの学生自身、また40代、50代の学生のご両親からの反応もとても良かった。農村出身の学生や、高校で農業を中心に勉強してきた学生も来ました。400人の募集に対し5、1

00人余りが、1年目に受験してくれました。農業、農学に興味を持っている人が少なくないのです。今までバイオテクノロジーなどと「農学」を隠してきましたが、現在こそ、食と農の問題が重要だと思われている人、意識している人たちがかなりおられるということです。

仏教・食・農業・農学

農学者から見れば、

- ▶ 人間は、食べなければ（消費しなければ）生きていけない存在。
- ▶ 人間は、光合成をすることができない。
- ▶ 植物や、動物の、それぞれの生命を頂戴して、ようやく自分の命をつなぐことができる存在。
- ▶ この事実から、目をそらすことができない。

仏教的考え方とも合致する。

- ▶ 人間は、植物の命、草食動物の命、肉食動物の命をいただいて、生きていく。
- ▶ 生命に対する畏怖と尊厳と感謝をもち、その上での「顕真」真実を明らかにする。
- ▶ 生命を考え、食を考える以上、さらに踏み込んで、農業のことを考えざるを得ない。
- ▶ これは、農家だけではなく、人間一般に通底することから。

2年目も昨年を上回って5、500人余りの受験がありました。

龍谷大学農学部 の4学科がめざすもの

農学部では、植物生命科学科、資源生物科学科、食品栄養学科、食料農業システム学科の4学科を設置しています。

まず概要を申しますと、植物生命科学科は、植物とは何かということを考える学問です。資源生物科学科は、農業と本来の農学が中心の学科です。果樹園芸学、作物学、土壌学等があります。

食品栄養学科は、管理栄養士を育てる学科で、病院や企業の食堂などで、栄養の判断をしたり、食事のメニューを考え提供する人を育てます。どういう栄養、食物を取って給食や、病院食にするかということを考えます。

最後に、食料農業システム学科は、経済学、経営学や社会学から農業を学ぶ学科です。

この4学科を一体として、農学部を立ち上げようとしたわけです。

植物は、そのものの性質も大切です。どうやって増やし、農地で育てるか。そしてどういう食事へと農作物を利用するか、さらにそれをどうやって販売するかというのを学びます。市場経済はさまざまな問題点を含んでいますが、現代では経営や市場のことを知らないで、これからの農業はやっていけません。

でき上がったものを、すぐJAに売るだけでは、これからの農業経営者は生きていけません。各地のJAも、さまざまな工夫が必要となってきましたし、各地域社会でも知恵をはたらかせる必要があります。同時に農業経営者も自分の知恵をはたらかさなくてはいけなくなります。

こうした四学科を一体として捉え、学べるような農学部をつくろうと思えました。

具体的には食の循環として、生産から

加工、流通、そして分配、販売までの仕組みを実習として学ぶことです。

植物生命科学科はバイオサイエンスであり、最新の科学の知見をえることは必要ですが、果たしてそれだけで良いのかということ、植物の生命に関する問題として捉えています。

資源生物科学科は土壌学や作物学です。他の大学では、ものの生産力を高めれば良いと考えられていました。しかし生産を高めればそれで済むかというと、そうではありません。どのように作物は循環していくのか、例えば反収が倍になる米をつくったとしても、どのように商品として売っていくか、あるいは倍にできる品種をどのようにすれば、環境保全的でありえるのかを考えなくてはならない。決して生産量や生産効率を良くするだけでは問題解決はできないのです。

食品栄養学科は、管理栄養士になる人が畑へ直接出向くことが可能になり、1回生から全学生が田んぼや畑で実習をしています。管理栄養士は、食材になる商

品を、どこで、どうやって手に入れるか、どれだけの量を確保できるかということ、これまでは見ていましたが、さらに進んで、どういう作物がどのように作られているかを知っておくことができます。単に市場で並んでいる農作物を見て、栄養学のことを語るのか、それだけではなく、農作物がどういうプロセスで、どこでできているのか、それぞれの土地でどういうふうに出てられているのかを語れる管理栄養士を育てることは食育上大きな意味があり、とても大事なことであり、本学の狙いでもあります。

食料農業システム学科では、経済、経営、社会学の分野にも及ぶものです。農業は経済の仕組みも知っておかなくては いけません。作るだけ作ったら良い時代ではなく、いかに売るか、また、売るために、あるいは輸出するためには、どういう税金や、輸入規制がかけられているのか。例えば、ヨーロッパは鯉節が輸入できません。鯉節をヨーロッパに輸出す

るためには、どのような手続きが必要か。そういうことも含めて考えなくては いけない。あるいは流通の問題で、食材をどれだけ保存し、どういうかたちで外へ出していくか。今後変化し続けますが、考えている以上に、食料の流通の技術的な革新は大きいと思います。

食の循環実習

昨年5月に田植えをしました。1年生の授業で食の循環実習というのがあり、後期から農作業をするため作物を最初に植えておく必要があります。1年生と、地元の人たちと、教職員がボランティアで田植えをしました。そのとき地元の農家の方が、今までは着ていなかった早乙女さむえの服を着て田植えに参加されました。これは若い学生がいるからです。私も学長も一緒に田植えをしました。こういうことによって、地域は活性化していきます。

さて、学生は、実習でようやくお米を収穫することができました。そして加工

することが出来ます。食品栄養科では食品として料理をつくって食べ、加工品をつくります。

また、田植えをした農場の近くの集落では、渋柿で非常に水準の高い干し柿をつくっておられました。これまでやめようという話もあったそうですが、学生ボランティアを動員して、作業も技術も教えていただき、売れるような干し柿にしようとしています。消えるかもしれない作業や技術も、学生を通して伝承していくことが可能であることの証^{あかし}となりました。

学生はいろんな作物を使って、座学のみならず、それをいかした物をつくることに非常に喜びを感じています。循環の体系は、作物を植えて、育てて、収穫して、加工して、自分で食べる。そして、やがてまた土に返され、また新しいものを育てるということになります。全体の循環を学ぶのが龍谷大学の農学部の大きな特徴の一つです。深い視野で循環を学

ぶことができるのは、仏教系大学の特徴であるかもしれません。

もう一つ重要なことは、早い時期に、食と農の倫理を教えています。サイエンスは、知的探究心で進化しますが、行き過ぎることもあります。一度立ち止まって、いったい自分が何をしているのかを考えるためには、倫理の問題を早い時期から教えることが必要になってきます。その上で基礎科目、関連科目、専門科目を設定して、自分たちの卒業研究につなげます。

世界で活躍する人材の育成

まだ農学部には2年生までしかいませんが、すでに彼らが卒業後、社会で活躍することを考えています。農学部は、農業を担^{にな}う人材を産み出しますが、関連産業がたくさんあることを知ってほしいのです。

農業の味方となる流通業が必要です。販売・サービス業も必要になる。幅広い就職先を前提にした農学部でありたいし、場合によっては、税関に勤める人や研究者になる人もいるかもしれない。つまり、農家だけのための農学部ではなく、社会全体に対して役割を果たしていく農学部をめざします。農業は社会の基本構造をなしているので、幅広い就職の中で支える人材を輩出したいと思います。

学生は農業の話は身近ではないと感じていたかもしれませんが、例えば今地震が発生したとすると、何が一番重要かを情報として知っています。食料と水は大事で、次はエネルギーが必要です。エネルギーは、徐々に解決の方向が見えてきていますが、一方、食料と水は次の課題となります。それは、日本だけでなく、世界も同様です。食料が本当に無くなつたとき、一番困るのは差し当たっての食べ物です。差し当たっての食べ物供給

されて、落ち着くと、今度は食べ物を産み出す仕組みを強化する必要がある。食料を援助するだけではなく、食料を産み出す仕組みをつくっていくのです。

世界には今も数々の難民問題があります。例えば、彼らが農業をすることができれば、自分たちの生活を維持し、生きがいが出てくると思います。自分の土地を離れたら、そういう生きがいの問題に直面します。人間の問題は常に基本に戻れば食べ物、そして生活、その上で自分のやるべき仕事が必要になってきます。農学が世界に果たす役割は、まだまだ大きいと思います。

さまざまなものを結ぶ農学の可能性

農学部は、食料と農業とを結ぶ、という考え方に基づいています。同時に、地方と都市、あるいは農村部と都市部を結ぶ役割も担っています。農業技術だけを増やしていくのではなく、いかに多くの国民に食物を持続的に行き渡らせるか。

そして、妥当なお金で流通できるかが、とても大事であると思います。

企業の場合には、サイエンスと企業とを結び付ける役割を、農学部は担うことができるのではないかと考えています。例えば、食物、農産物をどのように新鮮さを保ったままで保存していくか、この技術革新は大変たくさん可能性をうみだします。例えば新鮮なものをより遠くまで動かすことができるので、技術革新を起こしていくだろうと思います。

食料と農業という視点から見ると、日本は危機的な状態にあります。しかしよく考えますと、今の時代、社会を変えていき、大きく変わっていく可能性がある分野です。非常に長い間、農業や農村が、同じかたちで続いてきました。良い意味でも悪い意味でも変わらざるを得ないところに来ています。いかに知恵を出して、いかに役割を果たしていくか。社会と農学を結ぶプラットフォームとしての

役割を果たしていく必要があります。地元の人たちが来て、何かを相談して、その後、問題を解決していくプラットフォームです。社会的な問題解決を果たしていくことも大学の役割です。

特に、地域と社会は、単に地域おこしだけでなく、経済力を発展させなければうまくいかない。農業と結び付けた産業の創設もあるうと思っています。

先ほどのデータを見ると、農学部1年目の受験生は5、127名、2年目は5、569名です。つまり、農学部には受験生が来ないというのは勝手な思い込みで、35年間どこもつくってこなかったのです。しかしこの結果を見ると農業・農学は、今一番重要な、一番大きな問題を抱えている部門として関心が高いことがわかります。自分の家族や、自分の身体に影響のある、直接関与する問題として捉えようとしている。国民全体の食と農への関心が高いだけに、課題としては

大変大きな問題であると思います。

しかし、問題は、単純ではありません。生産量が上がれば良いとか、そういう単純な問題ではなく、大変複雑です。この複雑な問題を組み合わせて考える力を、龍谷大学農学部 학생には持つてほしいと期待しています。さらに私自身の問題意識では、日本など先進国が生き残るだけではなく、厳しい生存の問題に直面している人びとの食料や農業生産にも貢献できる学問であることです。先進国の大学で農学部果たす役割は、多くの人びとの生活の役に立ち、貢献する農学を構築していくことでしょう。多くの大学の農学部の体系の中ではなしえなかったことが、この龍谷大学でできると思っています。

作物ではなく人を育てる

これから学ぶべき点や研究すべき課題は、まだ非常にたくさんあります。学生自身も学んでいる途中です。しかし、可

能性として潜在的な農業への関心が高まり、学生たちから必ずや専門的な農業者が出てくることでしょう。今までのような農村社会のシステムのままでは駄目だと思います。これからは、若い人たちが出てきたときに、それを支えてあげるような地域社会であってほしいと思います。

農学部が一番中心的な考えは、作物を育てるのではなくて、人を育てることがポイントです。楽しくて自分の人生が思い描けるような仕組みを、学問の世界、大学の世界からつくり出していく。そうすれば、必ず多くの国民が農業の大切さに気付きます。

TPPを考えることも良い機会だったかもしれないと、逆説的に考えています。TPPは、非常にシンプルに言えば、農業を完全に市場経済化しようとすることです。マー

ケットメカニズムだけで動かしていく。しかし、行き過ぎたマーケットメカニズムだけでは、食と農の問題は解決できないと思います。われわれの文明は食と農の課題を放棄することはできません。重要な社会的課題であり続けるのです。大学も一翼を担いながら、マーケットメカニズムを利用しながらも、どのように社会全体を動かして、生命と生存を支えていく仕組みをつくるのが、重要な課題だと思います。困難な道ではありますが、農学も育てていきたいと考えております。どうもありがとうございました。

(講演終了)

※本稿は『宗報』二〇一六(平成二十八)年十一月合併号に掲載されました。

龍谷顕真会「第10回国内研修会」開催報告

開催日：2016（平成28）年7月28日（木）～30日（土）2泊3日

視察先：東京教区

参加者：17名（会員・非会員13名＋事務局4名）※名簿別添

日 程

期日	現地時間	行事内容	場所
7月28日 (木)	13:30	集合・受付	築地本願寺 講堂入口
	14:00	開会式	築地本願寺 本堂
	14:30	講義	築地本願寺 講堂
	16:10	築地本願寺 GINZA サロン訪問	築地本願寺 GINZA サロン
	18:00	夕食懇親会	銀座治作
	20:00	宿泊	コートヤード・マリオット銀座 東武ホテル
7月29日 (金)	7:00	築地本願寺朝参拝	
	10:00	国会議事堂訪問	国会議事堂
	11:45	築地顕真会との懇談会	衆議院第二議員会館
	13:30	東京都庁訪問	東京都庁
	14:40	東京オリンピック・パラリンピック 開催予定地視察	
	18:30	築地敬親都会との懇談会	京王プラザホテル 43 階 「ムーンライト」
	20:00	散会・宿泊	京王プラザホテル
7月30日 (土)	9:40	東京都慰霊堂訪問	東京都慰霊堂
	10:40	慈光院参拝	
	11:15	閉会式	慈光院本堂
	11:50	東京駅着・解散	
	12:30	羽田空港着・解散	

7月28日

(木)

龍谷顕真会「第10回国内研修会」日程・グラフ

時 間	行事内容	場 所
13:30	集合・受付	築地本願寺 講堂入口
14:00	開会式 ・開式の辞 ・勤行〔讃仏偈〕（調声：築地本願寺職員） ・挨拶：山本隆俊（龍谷顕真会代表世話人） ・挨拶：安永雄玄（築地本願寺宗務長） ・恩徳讃 ・閉式の辞	築地本願寺 本堂
14:30	講義 ・講師：菅原良成（築地本願寺副宗務長） ・講題：築地本願寺の取り組みについて	築地本願寺 講堂
15:30	講義終了	
16:00	築地本願寺発	
16:10	築地本願寺 GINZA サロン訪問 ※築地本願寺石川勝徳主任による案内	築地本願寺 GINZA サロン
16:30	築地本願寺 GINZA サロン発	
17:00	ホテルチェックイン	コートヤード・マリオット 銀座東武ホテル
17:50	ホテルロビー集合・移動	
18:00	夕食懇親会 ・開会のことば ・挨拶・乾杯：山本隆俊（龍谷顕真会代表世話人） ・食前のことば ・歓談 ・参加者挨拶・自己紹介 ・食後のことば ・閉会のことば	銀座治作
20:00	ホテル着・宿泊	コートヤード・マリオット 銀座東武ホテル

開会式



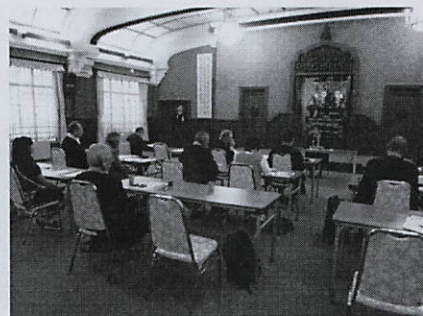
勤行



山本代表世話人挨拶



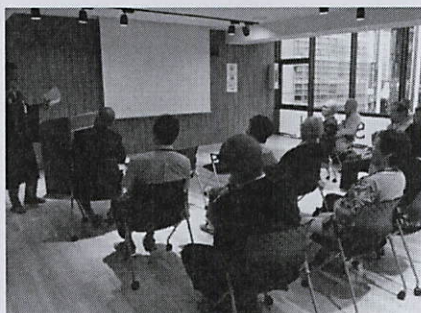
安永宗務長挨拶



講義



築地本願寺記念写真



GINZA サロン風景



7/28 夕食懇親会風景

7月29日

(金)

龍谷顕真会「第10回国内研修会」日程・グラフ

時 間	行事内容	場 所
7:00	築地本願寺晨朝参拝	衆議院第二議員会館
9:30	ホテル発	
10:00	国会議事堂訪問 築地間真会代表世話人 野田毅衆議院議員秘書 高砂満さんによる案内	
11:45	築地間真会との懇談会 ・開会のことば ・挨拶：石上智康（浄土真宗本願寺派総長） ・挨拶：山本隆俊（龍谷顕真会代表世話人） ・挨拶：野田 毅（築地間真会代表世話人） ・食前のことば ・出席者紹介 ・歓談 ・築地間真会世話人挨拶 ・食後のことば ・閉会のことば	
12:45	衆議院第二議員会館発	
13:30	東京都庁訪問 ※築地敬親都会副幹事長 菅野弘一東京都議会議員並びに並木好正東京都議会 議会局管理部広報課 PR コーナー担当による案内	
14:30	東京都庁発	
14:40	車窓より東京オリンピック・パラリンピック開催予定地視察 ※大澤清一オリンピック・パラリンピック準備局大会施設部調整課課長代理（競技会場担当）が同乗し、各所で案内 ・オリンピックスタジアム （開閉会式・陸上・ラグビー・サッカー） ・晴海埠頭（選手村） ・有明アリーナ（バレーボール）	

時 間	行事内容	場 所
	・有明テニスの森（テニス） ・オリンピックアクアティクスセンター（水泳：競泳・飛込・シンクロ） ・東京辰巳国際水泳場（水泳：水球） ・夢の島公園（アーチェリー） ・海の森水上競技場（ボート・カヌー：スプリント）	
17：15	ホテルチェックイン	京王プラザホテル
18：30	築地敬親都会との懇談会 ・開会のことば ・挨拶：石上智康（浄土真宗本願寺派総長） ・挨拶：山本隆俊（龍谷顕真会代表世話人） ・挨拶：立石晴康（築地敬親都会代表世話人） ・食前のことば ・乾杯：安永雄玄（築地本願寺宗務長） ・歓談 ・出席者挨拶・自己紹介 ・挨拶：藤谷光信（龍谷顕真会世話人） ・食後のことば ・閉会のことば	京王プラザホテル 43 階 「ムーンライト」
20：00	散会・宿泊	京王プラザホテル

国会議事堂訪問



国会議事堂記念写真



国会議事堂

築地間真会との懇談会



石上総長挨拶



山本代表世話人挨拶



懇談会風景

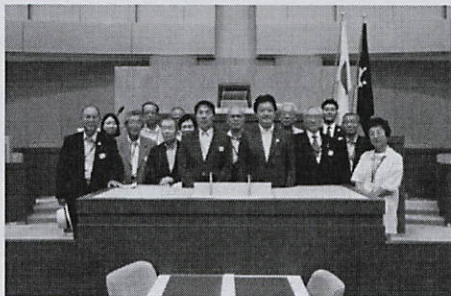


野田代表世話人挨拶

東京都庁訪問



東京都庁訪問



東京都庁記念写真

築地敬親都会との懇談会



石上総長挨拶



山本代表世話人挨拶



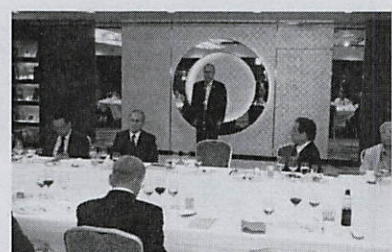
立石代表世話人挨拶



安永宗務長乾杯発声



出席者挨拶（野村幹事長）



藤谷世話人閉会挨拶

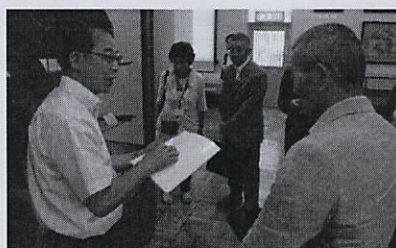
7月30日
(土)

龍谷顕真会「第10回国内研修会」日程・グラフ

時 間	行事内容	場 所
9:00	ホテル発	
9:40	東京都慰霊堂訪問 ※現地職員による案内、復興記念館見学	東京都慰霊堂
10:40	慈光院参拝 ・勤行〔重誓偈〕(調声：事務局員) ※杉浦浄澄 慈光院主管による沿革説明	
11:15	閉会式 ・開式の辞 ・挨拶：山本隆俊（龍谷顕真会代表世話人） ・恩徳讃 ・閉式の辞	慈光院本堂
11:30	慈光院発	
11:50	東京駅着・解散	
12:30	羽田空港着・解散	



慰霊堂訪問



復興記念館見学



慰霊堂前記念写真



勤行（慈光院）



慈光院沿革説明



閉会式

龍谷顕真会「第10回国内研修会」参加者名簿

	会役職	自治体役職名	名 前	教 区	組	寺 号	寺院役職
1	会 員	元札幌市議	柴田 薫心	北海道	札 幌	寶流寺	前住職
2	世話人	士別市議	谷口 隆徳	北海道	上川北	常德寺	住 職
3	会 員	元北見市議	松平 樹人	北海道	北見東	常楽寺	前住職
4			久世 篤史				
5	代表世話人	茨木市議	山本 隆俊	大 阪	茨木東	称名寺	住 職
6	世話人	元金城町議	笠川 紹隆	山 陰	浜 田	浄光寺	住 職
7			笠川 久枝				
8			大賀 初義				
9	世話人	元山口県議	藤谷 光信	山 口	岩 国	教蓮寺	前住職
10	会 員	元下関市議	井上 隆純	山 口	豊浦西	正音寺	住 職
11	監 査	元みやま市議	荒木 行也	福 岡	三門南	阿弥陀寺	住 職
12			荒木 邦枝				
13			草場 秋歩				
14	事務局員		東森 尚人	龍谷顕真会事務局長（所 務 部 長）			
15	事務局員		佐藤 浩紹	龍谷顕真会事務局員（所務部課長）			
16	事務局員		田坂 優子	龍谷顕真会事務局員（所務部賛事）			
17	事務局員		池田 唯信	龍谷顕真会事務局員（所務部録事）			

○築地間真会出席者

	会役職	役 職	名 前	秘 書
1	代表世話人	衆議院議員（自由民主党）	野 田 毅	高 砂 満
2	世話人	衆議院議員（無所属）	浅 尾 慶一郎	岡 野 傳
3	世話人	衆議院議員（自由民主党）	衛 藤 征士郎	神 田 信 浩
4	世話人	衆議院議員（民進党）	高 木 義 明	石 塚 拓 郎
5	世話人	衆議院議員（自由民主党）	竹 下 亘	大 滝 幸 雄
6	世話人	参議院議員（自由民主党）	林 芳 正	田 中 邦 治
7	世話人	参議院議員（民進党）	福 山 哲 郎	臼 井 章 喜

※竹下世話人については、公務中につきご欠席でした。

○築地敬親都会出席者

	会役職	役 職	名 前	選挙区
1	代表世話人	東京都議会議員	立 石 晴 康	中央区
2	幹事長	東京都議会議員	野 村 有 信	青梅市

○両懇談会への宗派からの出席者

	役 職	名 前	備 考
1	総長	石 上 智 康	
2	築地本願寺宗務長	安 永 雄 玄	
3	築地本願寺副宗務長	山 本 政 秀	※築地敬親都会との懇談会へ出席
4	築地本願寺総務部	熊 原 博 文	築地間真会事務局／※築地間真会との懇談会へ出席
5	築地本願寺総務部主事	龍 谿 乗 淳	築地間真会事務局／築地敬親都会事務局

第十回国内研修会レポート

『龍谷顕真会第十回国内研修会に参加して』

北海道教区札幌組寶流寺前住職

柴田 薫心

顕真会国内研修も十回を数えて、今年
は東京築地本願寺で開催されました。石
上総長にもお越し頂き、お二人の都議会
議員の先生方にも参加して頂きました。
そして、門信徒の方も数名見えておりま
して、意義ある会合になりました。

東京は二十三区二十六市からなり、日
本人口の一割を占めている日本の中心で
あり、翌三十一日は東京都知事選があり、
小池女史が知事となりました。都議が顕
真会に参加されたのも初めてのことで、
参加されたお二人とも築地本願寺の門徒
の方でした。

私は、毎年研修会に参加させて頂いて
おりますが、現職の議員の参加が二人で、

多数は元職の方です。今一度、各教区の
都道府県市町村関係の議員を紹介しても
らうことも、この会の目的に大切なこと
ではなからうかと思えます。

近いうちに海外視察もあるのではない
かと楽しみにしております。私も八十一
歳になります。出来るだけ早く企画して
ください。

合掌

『第十回国内研修会レポート』

久世 篤史

会員ではありませんが、松平様のお勧
めで参加させて頂きました。初めて訪れ
た築地本願寺での参拝、講堂での御講演、
GINZAサロンの訪問等、心に残る一日
でした。二日目は朝の散歩も兼ね歩いて
築地本願寺晨朝へ参拝しました。朝食後

は国会議事堂を見学し、築地顕真会との
懇談会、議員会館内での昼食は初めてで
した。午後は都知事選挙戦真つ只中の東
京都庁の訪問、東京オリンピック・パラ
リンピック開催各施設予定地等の視察は
ラッキーで、時宜を得たタイミングの良い
企画であったと思います。わが
町の人口四千人を切った現在、都庁の職
員十六万人、東京都がいかに巨大である
かを改めて知らされました。三日目は関
東大震災で亡くなられた方々の遺骨が納
められている東京都慰霊堂の訪問。そし
て築地本願寺分院「慈光院」の参拝と閉
会式で全日程が終わりましたが、国会議
事堂以外は初めての訪問、視察であり心
に残る研修でした。

お世話頂いた関係者の皆さんに心から
感謝申しあげます。有難うございました。

『第十回国内研修に参加して』

竺川 紹隆

今回は築地本願寺を中心に国会議事堂や東京都庁を訪問、築地聞真会や築地敬親都会との交流など、また近年続いている北海道北見市への訪問や鹿児島別院顕真会との交流などそれぞれ力強い念佛者と出逢うことができ、いつものことながら得難いご縁であると準備に奔走いただく事務局にお礼を申しあげたい。

この会でこの度の様な研修会は過去何度かあったが、いずれも都市開教という大きなテーマがあったように思う。昭和三十年代に始まった高度経済成長といううねりのような大きな流れの中、人々は経済的価値を求めて都市部へ集中した。

ここまでの物語は誰もがよく知っている。

振り返ってみると我々の教団は布教伝道の拠点である寺院の適正配置が出来ないまま今日を迎え、機関誌「宗報」には毎月のように寺院「解散」の告示がなされている。多くが過疎地と言われるかつ

ての布教の最前線であった。このような地域に在る一級寺院は、自らの存続を含め教団の構成員として都市開教という大きなテーマに向き合うこととなる。

「地方創生」とは真逆である。

都市開教の現場は通佛教どころか随分遠回りをしなければ原理にたどり着けなくなっている。私たち顕真会の会員は経済的利益の再配分の世界と宗祖の原理との両者に直面してきたのであるが今になって考えてみれば、自分自身の生き方が果たして宗教的であったのか自問をするものの、いつの間にか歳を重ねもう間に合わない。

会員動静

〔退会会員〕

志賀 諦了 元久住町議

大分・岡・明尊寺住職

(平成28年8月1日ご逝去)

会員名簿及び活動報告

活動報告内容（現職会員）

- ① 議会役職
- ② 所属委員会および役職
- ③ 地域団体役職
- ④ 所属党派・役職
- ⑤ 取り組みについて
- ⑥ その他（ホームページアドレス等）

柴田 薫心

元札幌市議

北海道・札幌・寶流寺前住職

松山 教宗

美唄市議

北海道・空知南・法正寺副住職

②産業・厚生委員会委員

③美唄商工会議所青年部地域交流委員会副
委員長、まちおこし委員会ラドラーズ会
長など

⑤産業・商工振興並びに雇用の創出、
まちづくり、観光地域づくり

亀井 義昭

元中川町長

北海道・上川北・極楽寺衆徒

谷口 隆徳

士別市議

北海道・上川北・常德寺住職

芳滝

仁

暮別町議

北海道・十勝・顕勝寺住職

櫻田 正弘

元北見市議

北海道・北見東・本覚寺衆徒

松平 樹人

元北見市議

北海道・北見東・常楽寺前住職

志茂田 玲

元練馬区議

東京・芝・光明寺衆徒

花木 肇正

元大島町議

高岡・射水・称念寺住職

大塚 泰雄

元高島市議

滋賀・高島・通安寺住職

山本 隆俊

元茨木市議

大阪・茨木東・称名寺住職

波多 正文

尼崎市議

兵庫・阪神南・正光寺住職

窪田 享信

元大田市議

山陰・大田西・願林寺前住職

竺川 紹隆

元金城町議

山陰・浜田・浄光寺住職

三浦

保法

元浜田市議

山陰・三隅・常福寺住職

大前

寛乘

坂出市議

四州・飯山北・善光寺住職

岩本

誠生

本山町議

四州・高知北・西光寺住職

藤谷

光信

元山口県議

山口・岩国・教蓮寺前住職

米沢

痴達

周南市議

山口・熊濃・真光寺住職

②教育福祉委員会

④無所属

⑤行財政改革、中心市街地活性化、
中山間地方振興

島田

教明

山口県議

山口・防府・善正寺住職

弘中

正俊

元防府市議

山口・防府・乗円寺前住職

秋里

勝道

元美東町議

山口・美祢東・明楽寺前住職

井上

隆純

元下関市議

山口・豊浦西・正音寺住職

松月よし子 糸島市議

福岡・志摩・海徳寺前坊守・衆徒

荒木 行也 元みやま市議

福岡・三門南・阿弥陀寺住職

高原 隆則 那賀川町議

福岡・那珂・教徳寺住職

①総務文教常任委員長

④政友会代表

佐藤 哲紹 元湯布院町長

大分・由布院・長因寺住職

唯有 幸明 国東市議

大分・国東中・妙光寺住職

志賀 信之 元朝地町議

大分・岡・西蓮寺前住職

佐々木一法 元五和町議

熊本・天草下・西明寺住職

二〇一七（平成二十九）年度

龍谷顕真会 総会 開催について

（予定）

期日：二〇一七（平成二十九）年 五月二十二日（月）

会場：聞法会館三階 研修室

日程：午後一時 総会

午後二時十五分 宗務懇談会

午後四時 公開講演会

〈終了後、交流会を行う予定です（京都市内会場未定）〉

会員の皆様におかれましては、どうぞご出席くださいますようご案内申しあげます。詳細については、追ってご連絡いたします。

—開催日時—
 2017(平成29)年
5月22日(月)
16:00～17:30
 —場 所—
間法会館3階研修室

■講師

龍谷大学政策学部長

ただとも けいし
只友 景士 師

■講師プロフィール

1966年岡山県生まれ。

1993年に滋賀大学経済学部を卒業後、京都大学大学院経済学研究科博士前期課程に進学し、1996年に修了。滋賀大学経済学部助手、講師、助教授(2007年から准教授)を経て、2011年に龍谷大学へ移籍、新設された政策学部の教授、2017年4月より同学部長。

専門：財政学、地方財政論、地域経済学、環境経済学。

共著に、『地方分権と財政責任』(勁草書房、1999年)、『沖縄21世紀への挑戦』(岩波書店、2000年)、『セミナー現代地方財政』(勁草書房、2000年)、『転換期のくらしと経済』(ナカニシヤ出版、2002年)、『セミナー現代地方財政Ⅰ』(勁草書房、2006年)

龍谷顕真会とは、間法及び宗門の組織的な社会的実践活動に寄与するため、浄土真宗本願寺派僧侶で、地方自治体の議員及び首長を会員として組織された団体です。

主催：龍谷顕真会

【事務局】浄土真宗本願寺派
 所務部<文書担当>内

**龍谷顕真会
 公開講演会**

参加費無料

■講演会内容

現代日本は、大都市へ人口が集中する一方で、地方では過疎化が深刻さを増しています。グローバル化が進み、情報技術をはじめ科学技術が高度に発達した現代は、社会の変化が激しく、これまでの工業社会とは違った新しい時代のステージに入っています。そんな時代の転換点にある中で、地域づくりの成功の方程式はありません。そんな時代に地域づくりを仕掛けるにはどうすれば良いのでしょうか。今回の講演では、様々な問題に直面している地域が、課題を解決しながら「持続可能なまちやむら」をつくることはそもそも可能なのか、「持続可能なまちやむら」をつくるには何が必要なのかをお話します。

まちづくりには、将来を構想する「構想力」とそれを実現する手立てが必要です。しかし、その構想力も経済問題に気を取られてしまい貧困化しているのではないのでしょうか。私たちの暮らす「まちやむら」を守り育て、そこに生きる人々が意義ある生き方ができる、そんな生きるに値する世界をつくる豊かな構想力が必要です。そして、構想されたことを実現する手立てとして、市民参加と協働、自治が不可欠です。まちあるきからまちのことを調べ考える活動、話し合いからまちを変える活動などを素材にしながら、まちの未来を考える豊かな構想力を育み、その構想を市民参加と協働、自治で切り開く可能性についてお話します。

まちづくりを
 仕掛ける
 (仮称)

事務局より

会費納入のご依頼について

（年会費 三、〇〇〇円）

会費未納の方は、事務局までご連絡の上、ご納入くださいますようお願いいたします。ご不明な点がございましたら、事務局までご連絡ください。

新会員勧誘のお願い

地方自治体の首長・議員に公選された宗派の僧侶の方で、本会に未加入の方をご存知でしたら、加入のご推奨をいただくとともに、事務局までご連絡ください。

公職選挙宗門推薦について

今後、選挙施行に伴う立候補を予定されている方は、宗門推薦をいたしますので事務局までご連絡ください。

ホームページについて

龍谷顕真会ホームページからリンクを希望されます会員は事務局までご連絡ください。

「龍谷顕真会ホームページ」

<http://r-kenshin.hongwanji.or.jp/>

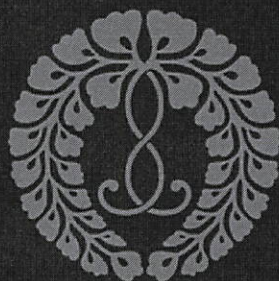
第25代専如門主 伝灯奉告法要

The Commemoration on the Accession of the Jodo Shinshu Tradition to the 25th Monshu Sennyō

法要期日

2016(平成28)年

- 第1期 10月1日(土)～ 8日(土)
- 第2期 10月20日(木)～ 27日(木)
- 第3期 11月4日(金)～ 11日(金)
- 第4期 11月18日(金)～ 25日(金)



2017(平成29)年

- 第5期 3月7日(火)～ 14日(火)
- 第6期 3月28日(火)～ 4月4日(火)
- 第7期 4月11日(火)～ 18日(火)
- 第8期 4月25日(火)～ 5月2日(火)
- 第9期 5月9日(火)～ 16日(火)
- 第10期 5月24日(水)～ 31日(水)

浄土真宗本願寺派 龍谷山 本願寺

TEL 075-371-5181(代) ホームページアドレス <http://www.hongwanji.or.jp>

『龍谷顕真会会報』(第34号)

2017(平成29)年3月発行

〔編集・発行〕龍谷顕真会事務局

〒600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下ル

浄土真宗本願寺派宗務所 所務部〈文書担当〉内

電話 (075) 371-5181 (代)